

# 運動疫学 ニュースレター



平成 27 年 12 月 10 日発行 No. 5

## 理事長就任のご挨拶

日本運動疫学会理事長 / 東京医科大学 井上 茂

9月17日の会務総会において日本運動疫学会の理事長にご指名をいただきました。責任重大ではありますが、日本で最もアクティブな学会と思われる本学会の舵取りをさせていただきますこと、大変栄誉に感じております。会員の皆様と協力しながら、更なる発展を目指したいと存じます。

さて、本会は1999年に運動疫学研究会として誕生しましたが、設立当初より会員の皆様の熱い情熱とともに発展し、種田前理事長のご指導のもと一昨年には学会となりました。現在では、日本学術会議協力学術研究団体に登録され、対外的にも学会としての体裁が整いました。また、学術総会、運動疫学セミナーを通して、多くの有望な若手研究者が育ってきています。新たな期のスタートにあたり、私の任期の2年間では以下の2点に力を注ぎたいと考えております。

### 1) 会員の研究・論文作成の支援

会員への情報提供、研究手法に関する学習機会の提供、会員相互の交流の活性化等を通して、会員の研究支援に力を入れたいと考えています。この中には若手研究者の育成支援も含まれます。

### 2) 情報発信の強化

エビデンスの創出のみならず、その発信に努めたいと思います。研究を実施して、論文を作成するとホッと一安心ですが、それをどう伝えるかも重要な課題です。会員の研究が広く認知されることは、社会貢献に留まらず、次の研究機会の獲得、新しい研究協力のきっかけとなります。また、得られたエビデンスを要約して学会の見解等を発信することが、学会のプレゼンスを高め、学会の発展につながると考えています。

以上の2つの目標を達成するためには各委員会の活動が重要です。各委

員会の委員長は下記の先生方にお願いしました(敬称略、会則記載順)。



編集委員会 中田 由夫 (筑波大学)  
学術委員会 安藤 大輔  
(山梨大学大学院)  
セミナー委員会 北畠 義典  
(埼玉県立大学)  
広報委員会 久保田 晃生 (東海大学)  
プロジェクト委員会 小熊 祐子  
(慶應義塾大学)  
総務・公式声明委員会 澤田 亨  
(医薬基盤・健康・栄養研究所)

活発な学会活動が展開されるように、尽力してまいりたいと存じます。会員の皆様のご協力を、よろしくお願い致します。

## 第18回 日本運動疫学会学術総会のご報告

第18回日本運動疫学会学術総会事務局 / 愛知みずほ大学 山根 基

2015年6月20日(土)、21日(日)の両日に中京大学名古屋キャンパスにおいて、第18回日本運動疫学会学術総会が開催されました。今回は初の試みとして開催時期を日本体力医学会とはずらして6月に、かつ会期を2日間に延長して開催いたしました。

学術総会のプログラムは、1日目に学術総会会長企画シンポジウムにおいて「身体活動促進に関する世界の動向」をテーマとして、井上茂先生(東京医

科大学)、武田典子先生(工学院大学)、田中千晶先生(桜美林大学)に講演いただきました。そしてFiona Bull先生(University of Western Australia)からは、ISPAHが本年設置した若手研究者及び専門家のネットワーク「Early Career Network」を対象として行った第1回ウェブセミナーのうち、「Are we making a difference yet?」を放映していただきました。先生方から現在、世界規模で実施されている身体活動促

進のための先駆的取り組みを紹介いただきました。続いての特別企画シンポジウムでは、「東京オリンピック・パラリンピック・レガシーと身体活動・運

### CONTENTS

1. 理事長就任のご挨拶	1
2. 第18回日本運動疫学会学術総会のご報告	1
3. 第16回運動疫学セミナーのご報告	2
4. 第1回「運動疫学の集い」参加報告	3
5. 日本スポーツ体育健康科学術連合日本運動疫学会企画シンポジウム：「スポーツ体育学研究における疫学的研究手法」に参加して	4
6. 私と運動疫学	4

動・スポーツの推進—学術はどう貢献できるか」をテーマに、まず布村幸彦先生（公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副事務総長）に基調講演をしていただき、その後、間野義之先生（早稲田大学）、Adrian Bauman 先生（Sydney University）＜Skype 出演＞、鎌田真光先生（ハーバード大学、国立健康・栄養研究所）に講演いただきました。2020年東京での五輪開催を通して、身体活動・運動・スポーツの普及、推進を図るために研究者や運動専門家がどのように貢献すればよいのか、その方法を考えるきっかけとなる貴重な機会となりました。1日目の最後に、懇親会を開催させていただき、参加者のみなさまが食事を楽しみながら相互に交流を図り、活発な討議や意見交換を行いました。また懇親会の会場においてイブニングセミナーとして、中田由夫先生（筑波大学）、笹井浩行先生（筑

波大学）に日本運動疫学会として今後推進する二つのプロジェクト研究を紹介いただきました。

2日目は、最初に基調講演として岡浩一朗先生（早稲田大学）に、続いての学術委員会企画の教育講演①では中田由夫先生（筑波大学）に、さらにセミナー委員会企画の教育講演②では小熊祐子先生（慶應義塾大学）に講演いただきました。

一般発表では、予想以上の応募演題数であったため、発表形式をポスター発表（24演題）と口頭発表（6演題）に分けて行いました。ポスター発表は、昼食を摂りながら行う形式としリラックスした雰囲気でしたが、そんな中でも活発な質疑が展開されていました。口頭発表は、事前に理事長、副理事長、学術委員に審査されて選ばれた6演題で行い、こちらも質の高い発表と質疑が展開されました。

ポスター発表の優秀発表者には笹井

浩行先生（筑波大学）が、口頭発表の優秀発表者には菊池宏幸先生（東京医科大学）、岩佐翼先生（東京医科大学）、鶴川重和先生（北海道大学）、鈴木宏哉先生（順天堂大学）、および安部孝文先生（身体教育医学研究所うんなん）が、最優秀発表者には北湯口純先生（身体教育医学研究所うんなん）がそれぞれ受賞されました。受賞されました先生方、おめでとうございます。

今回の学術総会では、予想を上回る多くの方に参加していただき（参加者総数162名）、みなさまのご協力により、エキサイティングで有意義な学術総会を開催することができました。来年度の第19回日本運動疫学会学術総会は、2016年6月18日～19日に井上茂先生（東京医科大学）が会長となり、東京で開催されます。現時点では会場は未定ですが、来年も、みなさまの積極的なご参加、ご発表をよろしくお願い致します。



最優秀発表者の北湯口純先生



第18回日本運動疫学会学術総会集合写真

## 第16回運動疫学セミナーのご報告

運動疫学セミナー委員長 / 埼玉県立大学 北島 義典

第16回運動疫学セミナーを2015年8月21日（金）～23日（日）の2泊3日で国立健康・栄養研究所ならびに戸山サンライズで開催致しました。今回も3つのコースを設定しました。受講者37名（ベーシックコース25名、アドバンスコース11名、フリーコース1名）、講師（11名）、アドバイザー（1名）、事務局（1名）の総勢50名の参加となりました。

本セミナーでは、いずれのコースも最終日の午後の「研究計画の発表」を

目指して、受講者がグループワークを通じて計画を立案するというものです。そのために初日から2日目夕方まで、受講者は研究計画立案に必要な内容及び最近のトピックの講義を受講し、2日目夕方からの計画立案に臨みます。今回ベーシックコースからはコホート研究3題、介入研究1題の計画が発表されました。短時間でしたので十分に吟味されていない部分もあったようですが苦勞の成果が出ていたと思います。一方、アドバンスおよびフリーコース

の3グループは講師から提示されたテーマに対して、コホート研究、症例対照研究、および介入研究での計画を発表しました。どれも興味深いものとなっています。全体的に年々発表内容が高度化している印象を受けます。今回、立案された内容は現在日本運動疫学会のホームページに掲載されておりますのでご覧ください。

セミナー委員会では受講者がセミナーで学んだ知識や経験、さらにはここで知り合った仲間や講師陣とのネッ

トワークをもとに、これからの研究活動をより推進していただくことを強く望んでおります。セミナー委員会では、さらに充実した内容のセミナーを提供

できるよう企画、運営を進めてまいります。来年度のセミナーの開催は8月中旬以降を予定しております。詳細が決まり次第、学会ホームページ等でお

知らせいたします。多数の方のご参加をこころよりお待ちしております。

## 私と運動疫学セミナー

早稲田大学 根本 裕太

私は5年ぶりに運動疫学セミナーに参加し、今回はアドバンスコースを履修させていただきました。セミナーではパワフルな講師の先生方による密度の濃い講義を聴講し、講義後の自由時間では講師の先生方や他の参加者の方と交流することができました。

2日目のグループワークでは、様々

な年代、職種の方と一緒に研究デザインを立案しました。限られた時間の中で発表内容をまとめるには苦勞しましたが、講義で学んだ内容を活用し、最終日の発表では万全な状態で臨むことができました。

本セミナーを受講するために全国各地から研究者が集まり、リピーターが

非常に多いと伺いましたが、それも頷けるほど充実した3日間を過ごすことができました。また来年も参加したいと思います。ありがとうございました。



グループワークでの真剣なディスカッション



講師陣と参加者との和やかな雰囲気

## 第1回「運動疫学の集い」参加報告

和洋女子大学 難波 秀行

2015年9月17日「第1回運動疫学の集い」が和歌山（体力医学会会場）で開催されました。これまで体力医学会の前日に行われていた日本運動疫学会が6月に独立して開催されたため記念すべき第1回目の試みとして行われた集いでした。

学術講演の一つ目のテーマ「遺伝子の疫学」村上晴香先生（独立行政法人国立健康・栄養研究所）では、身体不活動の原因として遺伝子が関与している可能性を示唆する内容でした。体育・スポーツの指導者は不活動な生徒や学生は、怠惰でサボりがちな第一印象を持つかと思いますが、遺伝子が不活動に関与していることが明らかとなれば指導の方法も変わってくるのかと思いました。また、不活動の原因となる遺

伝子を持っていることを自分自身で知っていれば、より不活動にならないような生活をすべく工夫ができるかもしれないと思いました。運動指導の現場レベルに落とし込むには、今後、研究の積み重ねが必要だと思いますがとても重要なテーマと感じました。

二つ目のテーマ「身体活動測定法」笹井浩行先生（筑波大学医学医療系・日本学術振興会）では、様々な身体活動測定法に関するレビューに加え、座位行動の測定方法について、原理や解析方法などの紹介がありました。特に従来の腰部装着型の加速度計では、座っているのか、横たわっているのかの区別がつかないため、これまで1.5METs未満の活動内容はあいまいにしか評価できていないためとても重

要なテーマだと感じました。また、疫学研究の分析手法として因果関係を明らかにするために操作変数法の紹介があり、既存のデータでも分析方法を工夫することで新たな知見が導きだされるかもしれないと思いました。

来年度の運動疫学の集いには、体力医学会前日に行われることの利点を生かして、地域・職域の健康づくりやスポーツ医学分野と運動疫学を絡められるような企画により、他分野からの参加者が増えるようなことができれば良いのではないかと思いますがいかがでしょうか。



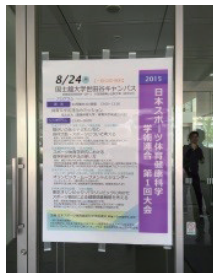
## 日本スポーツ体育健康科学学術連合 日本運動疫学会企画シンポジウム： 「スポーツ体育学研究における疫学的研究手法」に参加して

順天堂大学 涌井 佐和子

日本体育学会前日にシンポジウムが開催され、種田行男先生、内藤義彦先生の座長のもと、1) スポーツ体育学と運動疫学（澤田 亨先生）、2) 疫学的研究手法の概要（中田 由夫先生）、3) ど



うすればケガをしないか」を明らかにすることを旨とする研究手法（笹井 浩行先生）、4) 「どうすれば勝てるか・スキルアップできるか」を明らかにすることを旨とする研究手法（門間 陽樹先生）、5) 疫学研究フィールドとしての大学体育（木内敦詞先生）6) 疫学的研究手法を取り入れたフィットネスクラブの利用者増加対策（菊賀信雅先生）、以上の



6名の先生方の講演を視聴しました。「疫学」という言葉は医学的なイメージが強く、体育学会でこの言葉はほとんど目にしたことがありません。当日は日本スポーツ体育健康科学学術連合代表の福永哲夫先生をはじめ、他領域でご活躍の先生方も多数参加されており、スポーツ体育学分野での「疫学」の有用性・重要性を学ぶ良い機会となりました。



### 「私と運動疫学」

中京大学 種田 行男

私と運動疫学との出会いの場は、（財）明治生命厚生事業団体力医学研究所でした。研究所に勤めて直ぐに、すべての研究所員の共同による「高齢者の健康づくり」をテーマにしたプロジェクト研究がスタートしました。この研究の特徴的なことは、研究成果を社会に還元することを強く意識したことでした。今ではあたりまえのことですが、25年前の私にはとても先駆的な試みに感じられました。

当時の研究所には高齢者の健康に精通した方が居なかったため、まずは先行研究をレビューしたり、専門家からアドバイスを得たりして、高齢者の健康特性について理解を深めることから始まりました。この作業を通じて我々



2013年、柳川洋先生の喜寿のパーティーにて左から筆者、柳川先生、荒尾先生

は、「この研究を進めるには運動生理・生化学的あるいはバイオメカニクスのアプローチだけでは不十分である」ことに気づきました。

さまざまな議論の結果、最終的に我々の研究は高齢者の身体的自立能力を評価するための指標である「生活体力の測定法」を開発することになりました。生活体力とは、これまでのように体力を「筋力」、「持久力」、「柔軟性」などの要素別ではなく、「起居能力」、「歩行能力」、「身辺作業能力」などの日常生活における動作能力別に評価するものです。

新たな測定方法の開発には、測定値の信頼性と妥当性の検討が不可欠であり、これには疫学的研究手法を積極的に活用することになりました。具体的には、横断的観察研究によって生活体力の関連要因（罹患歴、生活習慣、精神的機能、社会的機能など）を検討しました。また、6年間の縦断的観察研究および5年間の長期介入研究によって、生活体力水準とADL障害および死亡との関連性をそれぞれ明らかにしました。

幸運なことに、これらの研究はいく

つかの厚生労働省科学研究助成による研究班の中で長期的に実施することができました。そこでは、最初の研究班の代表者であった柳川洋先生を始め、能勢隆之先生、児玉和紀先生、中村好一先生などといった我が国の疫学を代表する方々から直接ご指導いただくことができました。

振り返ってみますと、研究を進展させるには人との出会いが大切だとつくづく思います。日本運動疫学会には「運動と健康に関する研究」を進める研究者が数多く結集しています。本学会がみなさんの大切な出会いを創造する場となり、我が国の運動疫学研究がさらに発展することを大いに期待しています。



発行：日本運動疫学会  
日本運動疫学会事務局  
〒160-8402 東京都新宿区新宿 6-1-1  
東京医科大学公衆衛生学分野  
E-mail: [jaee.info@gmail.com](mailto:jaee.info@gmail.com)